

チベット中観思想における時間論の展開

「刹那」の概念を中心に

根本 裕史

1 問題の所在

時間の連続体とそれを構成する不可分な極小点をめぐるパラドックスは古今東西の哲学者達を悩ませてきた難問であり、チベットの仏教思想家達もまた、そうした問題について様々な議論を展開してきた。本稿は仏教において時間の最小単位として立てられる刹那 (skad cig ma) の概念に着目し、それがチベット中観思想史を通じてどのように理解されてきたかを探るものである⁽¹⁾。

既に筆者が論じているように⁽²⁾、ツォンカパ・ロサンタクパ (Tsong kha pa blo bzang grags pa: 1357–1419) 以降のチベット中観思想において時間に関する議論として注目されるのは、過去の物 ('das pa/zhig pa) が結果を生み出す能力を具えた効果的事物 (dngos po) であるか否かという議論である。すなわち、ツォンカパは中観帰謬派が「過去の物は効果的事物である」という独特の理論を立てていると考えた。それに対し、タクツァンロツァーフ (sTag tshang lo tsā ba: b. 1405) を始めとする他宗派の学者達はこのツォンカパの見解を厳しく批判したのである。

一方、ツォンカパ以前のチベットの中観解釈において、時間に関する議論の中心を占めていたのは刹那の分割可能性をめぐる問題である。カダム派の学者チャパ・チューキセンゲ (Phya pa chos kyi seng ge: 1109–1169) は中観作品 *Shar gsum stong thun* において離一多性証因に基づく無自性論証を解説する中でこの問題を取り上げ、刹那が不可分の単一体であることを否定している。中観の立場において刹那の単一性が否定されるという事実は決して驚くべきことではないが、チャパの時間論にはもう一つ大きな特徴がある。それは、彼が中観派の刹那否定の論理をプラマーナ文献における刹那解釈の中にまで持ち込んでいるという点である。*Tshad ma yid kyi mun sel* 等に見られるそうしたチャパの見解は彼の弟子であったツルトウン・シヨンヌセンゲ (mTshur ston gzhon nu seng ge: ca. 1150–1210) によって批判的に言及され、さらにツルトウンの下で論理学を学んだサキャ派のサキャパンディタ (Sa skya paṇḍita: 1182–1251) によって本格的に批判される。サパンは *Rigs gter* とその自註⁽³⁾において唯識説の立場から中観派の時間論を批判し、刹那が部分を持たない実在であることを主張するのである。だが、サパンの行なった批判は、*Rigs gter* の註釈者達による若干のコメントを除いては注目を集めることはなかった。そして、ゲルク派の論理学文献や中観文献では刹那の単一性をめぐる問題自体があまり議論されなくなり、それに代わって三時 (dus gsum) の定義や、未来と過去の存在論的位置づけなどをめぐる問題が注目を集めるようになるのである。

本稿では個々の主張について詳細に検討する余裕はないが、チャパやサパンを始めとするチベットの代表的な思想家達が刹那をめぐる問題に対してどのようなアプローチをしてきたのかを概論し、これまで明らかにされてこなかった思想史の一端を描くことにしたい。

2 チャパ・チューキセンゲの刹那理解

周知のように 2006 年に出版された *bKa' gdams pa'i gsung 'bum*⁽⁴⁾ にはカダム派の学者達によって著された貴重な作品が数多く含まれており、これまで未解明であったチベット仏教黎明期の実態を探る上で極めて有益である。刹那の分割可能性をめぐる議論はチャパ・チューキセンゲの *Shar gsum stong thun*⁽⁵⁾ (109.1 ff.)、*Tshad ma yid kyi mun sel*⁽⁶⁾ (70a5 ff.)、*Shes rab 'od zer*⁽⁷⁾ (113a9 ff.) などに見られる。この内、*Shar gsum stong thun* に展開される議論はマチャ・チャンチュブツォンドウ (rMa bya byang chub brtson 'grus: d. 1185) の *Rigs tshogs rgyan*⁽⁸⁾ (20b3 ff.) に簡略化された形で再登場し、一方、論理学作品である後二者におけるチャパの見解はツァンナクパ (gTsang nag pa: 12c.) の *Legs bshad bsdus pa*⁽⁹⁾ (122b6 ff.) において継承される⁽¹⁰⁾。以下では、カダム派の刹那解釈の源流をなしたと思われるチャパの解釈にのみ着目することにしよう。

(1) *Shar gsum stong thun*

Shar gsum stong thun は、中観自立派の学説を重視したチャパが自身の中観解釈を体系的に記述した作品である。彼は同書の後半で離一多性証因に基づく空性論証を詳細に分析し、その論証における主題所属性 (phyogs chos) すなわち「全ての事物が勝義として単数性と多数性を欠いていること」を確立する中で刹那の問題を取り上げている。彼によれば、ヴァスバンドウ (Vasubandhu) の *Vimśatikā* k.12⁽¹¹⁾ に説かれる極微論批判を用いることで、諸々の極微から構成される知識外部の対象が一と多の自性を欠くことを指摘することは可能である。しかし、空間的な制限を受けない知識がそうであることを、極微論批判によって論証することはできない。外界対象と知識とを含む一切の事物が空であることを論証するためには、両者に共通して関係するものである「時間」にこそ着目し、その単数性と多数性を否定せねばならない。つまり、少なくともチャパにとって中観派の立てる離一多性の理論とは、時間の単数性と多数性を否定することを通じて一切の事物の空性を証明する理論に他ならないのである。

そして、チャパは全ての事物が刹那的存在であること (dngos po tsam po'i spyi la skad cig mas khyab pa) を論じた後、刹那が無際限 (thug myed) に分割され得るものであること、言い換えれば、刹那が複数の部分から構成されており単数性を欠いたものであることを論証する。彼は次のような論証式を立てている。

skad cig ma la'ang thog ma dang dbus dang tha ma'i cha gsum yod pas khyab ste / snga phyi gnyis kyi bar na gnas pas khyab pa'i phyir nyin mo'i dus bzhin no (*Shar gsum stong thun*, 112.10–11)

(主張：) 刹那もまた、必ず前中後の三部分を有する。

(証因：) 必ず以前と以後の両者の間に存在するゆえに。

(喩例：) 日中の時間の如し。

チャパはこの論証について次のように説明する。まず、刹那は必ず自身の原因によって生み出されるものであり、尚且つ、生じた直後には消滅するものである。それゆえ、刹那はそれが未だ存在していない時と、それがもはや存在しなくなった時の中間に存在するものである。そして、およそ以前と以後の二つの時間の間に存在するものは、必ずその内部に前中後の三部分を有する。なぜなら、そうした遍充関係は日常的に経験される事例に基づいて容易に知られるからである。例えば、夜明けと日没の二つの時間の間に挟まれた日中の時間は、夜明けの時間に接する部分としての午前、日没の時間に接する部分としての午後、そして、その間にある正午という三つの部分から構成されている。このようにして、およそ以前と以後の二つの時間に挟まれて存在するものは必ず三つの部分に分割され得るのである。従って、以前と以後の二つの時間の間に存在する刹那もまた、必ず三つの部分に分割され得るということが結論される。

以上のチャパの説明は、彼自身が引用するナーガールジュナ (Nāgārjuna) の *Ratnāvalī* I 69-72⁽¹²⁾ から敷衍されたものである。つまり、チャパは *Ratnāvalī* に説かれる論理を導入することによって、離一多性証因に基づく空性論証を時間に関する議論として捉え直したのだと言える。

(2) *Tshad ma yid kyi mun sel* と *Shes rab 'od zer*

Tshad ma yid kyi mun sel はチャパの論理学作品の一つである。この作品は「知の分類の確定」(1b-11a)「量の定義と分類の決択」(11a-41b)「現量の決択」(41b-43b)「比量の決択」(43b-81b)「論争の言葉に関する方軌」(81b-96a)とそれぞれ題された五つの章から構成されている。第四章「比量の決択」において「共存不可能の対立 (lhan cig mi gnas pa'i 'gal ba)」の概念に関する解説 (68a9 ff.)⁽¹³⁾を行なう中で、チャパは対抗者 (gnyen po) が排除対象 (gnod bya) をどのような時間的プロセスを経て退けるかについて議論している (69a5 ff.)。その議論の派生的トピックとして扱われるのが、時間は無際限に分割され得るか否かという問題である (70a5 ff.)。なお、これと同じ問題はチャパの *Pramāṇaviniścaya* 註 *Shes rab 'od zer* (113a9 ff.)でも取り上げられているが、当該箇所における *Tshad ma yid kyi mun sel* と *Shes rab 'od zer* の議論は字句に至るまでほぼ一致する⁽¹⁴⁾。

チャパによると、強力な火などといった対抗者が寒気などといった排除対象を退けるには最短で三刹那を必要とする。第一刹那において対抗者と排除対象とが集合 (tshogs) し、第二刹那において後者が無能力にされ (nus pa myed par byas)、第三刹那においてそれが退けられる (ldog) のである。これは明らかにダルモータラ (Dharmottara) の説を踏襲したものである⁽¹⁵⁾。しかし、チャパは一旦このような説明を与えつつも、実はこれは刹那の無部分性を認める実在論者 (dngos por smra ba) の説に過ぎないとしている。中観派の見解によれば、時間の

最小単位である刹那は前中後の三部分からなっている。この立場に立つ場合、第一刹那を三分割した内の最初の段階において対抗者と排除対象が集合し、中間の段階において後者が無能力にされ、最後の段階においてそれが退けられるということが可能であると認められるのである⁽¹⁶⁾。さらに、チャパは中観派の立場に立脚した上で、時間にも空間にも短さの限界はないと断言する。

dus kyi nges gzung ni mi 'dod de nges gzung la dus kyi mthas khyab pa yin na thog mtha' med pa'i dus la ring tshad thug pa med pa ltar cha dang char phye ba la'ang thung tshad thug pa med pa yin no / de bzhin du nam mkha'i mthas khyab pa'i yul la che tshad thug pa med pa ltar rdul la cha dang char phye ba'i thung tshad la'ang thug pa med pa yin no // (*Tshad ma yid kyi mun sel*, 70a8–9 = *Shes rab 'od zer*, 113b4) ⁽¹⁷⁾

〔中観の立場において〕時間に境界を定めることは認められない。〔もし時間に〕境界を定めること〔が可能〕ならば時間には必ず果てが〔ある〕はずである。しかし、始まりと終わりのない時間に長さの限界がないように、〔時間を〕各部分に分割しても短さに限界はない。それと同様に、虚空の果てに至るまで遍満する空間に大きさの限界がないように、極微を各部分に分割しても小ささに限界はないのである。

この記述が意味するのは、勝義として単数の事物は全く存在しないということである。当然ながら、世俗のレベルでは単数の事物の存在も認められるが、チャパの表現を用いれば、それは「部分を有する単数 (cha dang bcas pa'i gcig)」でしかない。つまり、それは真実としては単数とは言えないような、あくまで仮に認められた単数に過ぎないのである。そして、単数の物が勝義として存在しないならば、それによって構成されるべき多数の物も勝義としては存在しない。従って、勝義としてはいかなる事物も存在しないという中観派の結論が導かれる。以上のようにして論理学説の解釈に中観の視点を導入している点に、チャパの独自性を認めることができるであろう⁽¹⁸⁾。

3 サパンの刹那理解

サパンは *Rigs gter* 第一章の末尾において刹那の問題を取り上げ、「刹那は諸部分から構成される」という中観説をダルマキールティ (Dharmakīrti) の唯識の立場から批判している (*Rigs gter rang 'grel*, 54.27 ff.; 福田・木村・荒井 1989: 52 ff.) ⁽¹⁹⁾。サパンはチャパの名や作品に言及しているのではないが、そこにおいて前提とされているのは明らかにチャパの見解である。ただし、サパンが決して「チャパの中観理解」を批判しているのでもなければ、「チャパの時間論」を批判しているのでもないことに注意を要する。と言うのも、そこでサパンが展開している議論とはダルマキールティの立場を代弁する形を取って中観派の時間論を批判したものであり、サパンが自ら理解する中観派の時間論について語っているわけではないからである⁽²⁰⁾。サパンが *Rigs gter* の当該箇所ではチャパ批判を意図していたとするならば、それはチャパの中観理解そのものを批判しているのではなく、チャパが「ダルマキールティの論理学説を中観の

立場から解釈した」点を批判しているのだと理解せねばならない⁽²¹⁾。

さて、サパンは最初に「刹那は三部分を本体とする」という中観派の見解を提示している。彼によれば、刹那の単一性を否定する中観派の論理とは *Vimśatikā* k.12 に説かれる極微の単一性の否定の論理に等しいものである。しかし、空間に関して適用された論理をそのまま時間に関して適用することはできないと彼は言う⁽²²⁾。では、なぜ極微の否定の論理をそのまま刹那に関して適用することが許されないのでしょうか。その理由は以下の偈頌に端的に示されている。

rags pa cig char bskor bas na // dbus kyi rdul phran cha bcas 'gyur // dus gsum cig char mi
skye bas // da lta'i skad cig cha med yin // (*Rigs gter*, 56.3–6)

粗大な物〔の場合に〕は〔外側の複数の極微が〕同時に〔中央の極微〕を取り囲んでいるので、中央の極微は部分を有することになる。〔しかし〕三つの時間は同時に生起しないので、現在の刹那は部分を持たないものである。

まず、極微の場合には次のことが言える。物質の最小単位としての極微が複数集合することによって粗大な物が構成されることから、一つの極微の周囲を複数の極微が取り囲んでいると想定せねばならない。しかし、そうした場合、中央にある極微は周囲にある複数の極微に接する複数の面を有することになるので、それは複数の部分から構成されていなければならないというパラドックスが生じる。この論法によって極微の単一性が否定されることは、サパン自身も認める所である。ところが、彼によれば、同じ論理を時間に適用することはできない。なぜなら、前中後の三つの時間は同時には生起しないため、隣り合った極微同士の場合とは違って、それらが相互に接することもあり得ないからである。実在する時間は現在の一刹那のみであり、未来と過去の刹那は非実在である。そして、現在の一刹那は、空間的な区分を設けるような仕方で分割され得るものでは決してない。以上のサパンの批判は明らかに、「時間の空間化」に伴う誤謬を鋭く指摘したものである。

刹那の単一性を唱えるサパンの主張は、ダルマキールティの *Pramāṇaviniścaya* II の「刹那に部分は存在しない」⁽²³⁾という記述に基づくものである。*Pramāṇavārttika* III 359⁽²⁴⁾に見られるように、ダルマキールティは離一多性の理論も用いているが、サパンによれば、それは決して時間が一と多の自性を欠いていることを帰結するものではなく⁽²⁵⁾、空間 (yul) や所取・能取 (gzung 'dzin) が一と多の自性を欠くことを論じる意図で説かれたものである。サパンはダルマキールティの見解をこのように理解した上で、その見解に沿った形で刹那が「部分を持たない実在 (cha med kyi dngos po)」であることを主張しているのである。

それでは、唯識説を離れて中観の立場に立つ場合には、チャバが論じているように刹那の単一性が否定されることになるのだろうか。サパン自身はこの問題に対して明白に答えていないが、ギェルツァブジェ・ダルマリンチェン (rGyal tshab rje dar ma rin chen: 1364–1432) の *Rigs gter* 註には次のような興味深い記述が見られる。

sems tsam pa'i lugs 'jog pa na / dbu ma pa la lan 'debs tshul mdzad pa yin gyi / rang lugs la

rdul dang skad cig cha med 'gog nus su mi mtshungs par bzhed pa ma yin no // (*Rigs gter Dar fīk*, 15b6–16a1)

〔ここでサパンは〕唯識派の学説を立てる中で、中観派に対する回答の仕方を〔提示〕なさっているのであって、自説として「極微〔が無部分であること〕と刹那が無部分であることを同じように否定することはできない」と主張なさっているのではない。

この註釈によると、サパンの最終的な立場は中観にあるが、*Rigs gter* では暫定的に唯識説に立った上で刹那の単一性を主張しているに過ぎないのだということになる。ギェルツァブジェがいかなる意図をもってこのような註釈を施したかは不明であるが⁽²⁶⁾、一つの理解の可能性を示唆するものであると言える。

4 ゲルク派における刹那理解

最後に、ゲルク派でのこの問題へのアプローチの仕方を見ることにしたい。ゲルク派を築いたツォンカパは『色の最小や時間の最短などに関する問答 (*gZugs kyi chung mtha' dang dus kyi thung mtha' sogs las brtsams pa'i dri lan*)』と題される韻文体の小品を残している。これはションヌ・ロデン (*gZhon nu blo ldan*) という学者からの質問に対する返答として著されたものであり、物質と時間の最小単位をめぐる興味深い問題を扱っている。しかし、この作品ではヴァスバンドウの *Abhidharmakośa* などに依拠して毘婆沙師もしくは経量部が認める時間観が語られるのみであり⁽²⁷⁾、残念ながら刹那の単一性を否定する中観派の見解については言及されていない。

中観派の刹那観に関しては、ツォンカパの弟子ギェルツァブジェによる *Ratnāvalī* 註 *sNying po'i don gsal* (18a6 ff.) が注目される。同作品では刹那が諸部分を有するゆえに無自性であることや、離一多性証因に基づく無自性論証などが略説されるが、概ね *Ratnāvalī* の語釈に終始しており、ギェルツァブジェの独創性は見られない⁽²⁸⁾。

ゲルク派の中観文献において刹那の単一性をめぐる議論が注目されていない要因の一つは、同派の中観解釈の中で離一多性の理論があまり重要視されていないためと思われる。チャンドラキールティ (*Candrakīrti*) の *Madhyamakāvatāra* が中心に据えられたゲルク派の中観研究では、この理論が主要な位置を占めることはない。そして、離一多性の理論なくしては、刹那の単一性を否定する議論が展開されることもあり得ないのである。ゲルク派の文献において離一多性の理論が主要なトピックとして登場するのは、むしろ般若学・前段 (*phar phyin skabs dang po*) の関連文献においてである。例えばギェルツァブジェの *rNam bshad snying po rgyan* (11b1 ff.) やジャムヤンシェーパの *sKabs dang po'i mtha' dpyod* (38a2 ff.) では、ハリバドラ (*Haribhadra*) の *Sphuṭārtha* に依拠した形で離一多性証因による無自性論証が論じられる。だが、その議論の中で刹那の問題は取り上げられておらず、カダム派の学者達が残した成果は全くそこに反映されていない。ましてや、サパンの *Rigs gter* で展開された批判がゲルク派の時間論に影響を及ぼすこともなかったのである⁽²⁹⁾。

5 結語

初期チベット仏教の中観解釈において、時間の最小単位としての刹那をめぐる問題が大きく取り上げられていたことは以上より明らかとなった。中でも刹那の単一性を否定したナーガールジュナの論法を発展させる形で、離一多性証因による無自性論証を時間に関する議論として再解釈したチャパの功績が注目される。チャパの理解によると、真実の観点からすれば時間とは数量化され得ないものであり、そのような性格を持つ時間によって支配された全ての存在が真実としては一と多の自性を欠いたもの、つまり、無自性なるものであることになる。彼はこうした中観派の時間論をダルマキールティ論理学解釈の中にも適用しようと試みた。それに対し、サパンはダルマキールティ説を唯識の立場と捉え、その立場を代弁する形で「刹那は部分を有する」とする中観説を否定している。サパンの理解する唯識の立場において時間とは空間と異なって、分割され得ない単一の実在である。この主張が含意するのは、現在の一刹那の心のみが実在するということである。チャパの議論とサパンの議論は、そもそも各々の立脚する思想的立場が相異なるため、内容的には必ずしも噛み合っているとは言えないが、時間の最小単位をめぐるアポリアに関して彼らが展開している議論は、哲学的な視点から見て興味深いものであると言える。ツォンカパ以降のゲルク派の学者達が刹那の単一性の問題にあまり関心を払わなくなった理由は定かではないが、この問題と密接に関連する離一多性の理論が注目されなくなったことがその理由の一つではないかという仮説を提案するに留めたい。

略号表

dKa' gnas rnam bshad rNgog blo ldan shes rab. *Tshad ma rnam nges kyi dka' gnas rnam bshad*. Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang. 1994.

bKa' gdams pa'i gsung 'bum *bKa' gdams pa'i gsung 'bum 'phyogs sgrig thengs dang po*. Ed. dPal brtsegs bod yig dpe mnying zhib 'jug khang. 30 Vols. Si khron mi rigs dpe skrun khang. 2006.

bKa' gdams gsung 'bum dkar chag *bKa' gdams pa'i gsung 'bum 'phyogs sgrig thengs dang po'i dkar chag*. Ed. dPal brtsegs bod yig dpe mnying zhib 'jug khang. Si khron mi rigs dpe skrun khang. 2006.

sKabs dang po'i mtha' dpyod 'Jam dbyang bzhad pa ngag dbang brtson 'grus. *bsTan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi mtha' dpyod shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i don kun gsal ba'i rin chen sgron me*, stod cha. bKra shis 'khyil ed. Ja.

'Gal 'brel gyi rnam gzahag rGyal tshab rje dar ma rin chen. *'Gal 'brel gyi rnam gzahag nges par byed pa'i tshul*. Tohoku No. 5447. Zhol ed. Ca.

sNying po'i don gsal rGyal tshab rje dar ma rin chen. *dBu ma rin chen phreng ba'i rnam bshad snying po'i don gsal bar byed pa*. Tohoku No. 5427. Zhol ed. Ka.

Thub dgongs rab gsal Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan. *Thub pa'i dgongs pa rab tu gsal ba in dPal ldan sa skya pa'i bka' 'bum* (*The Collected Works of the Founding Masters of Sa-skya*), Vol. 10 (tha).

'Thad pa'i rgyan rMa bya byang chub brtson 'grus. *dBu ma rtsa ba shes rab kyi 'grel pa 'thad pa'i rgyan*.

- Dharma Chakra Center. Sikkim. 1975.
- Dri lan** Tsong kha pa blo bzang grags pa. *gZugs kyi chung mtha' dang dus kyi thung mtha' sogs las brtsams pa'i dri lan*. Tohoku No. 5353. Zhol ed. Da.
- rNam nges Dar ṭik** rGyal tshab rje dar ma rin chen. *bsTan bcos tshad ma rnam nges kyi ṭikka chen dgongs pa rab gsal gyi stod cha*. Tohoku No. 5453. Zhol ed. Ja.
- rNam bshad snying po rgyan** rGyal tshab rje dar ma rin chen. *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi 'grel pa don gsal ba'i rnam bshad snying po'i rgyan*. Tohoku No. 5433. Zhol ed. Kha.
- PV** Dharmakīrti. *Pramāṇavārttika*: Y. Miyasaka ed. *Pramāṇavārttika-kārikā (Sanskrit and Tibetan)*, *Acta Indologica* 2. pp. 1-206. 1971-72.
- PVin II** Dharmakīrti. *Pramāṇaviniścaya* Chapter 2 (Svārthānumāna): E. Steinkellner ed. *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ, zweites Kapitel: Svārthānumānam, Teil I, tibetischer Text und Sanskrittexte*. Österreichische Akademie der Wissenschaften, philosophisch-historische Klasse, Sitzungsberichte, 287. Band, 4. Abhandlung. Veröffentlichungen der Kommission für Sprachen und Kulturen Südasien, Heft 12. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften. 1973.
- PVinṬ** Dharmottara. *Pramāṇaviniścayaṭīkā*: Tibetan sDe dge ed. Tohoku No. 4229. *Tshad ma Dze*.
- dBu ma chen mo** 'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje ngag dbang brtson 'grus. *dBu ma 'jug pa'i mtha' dpyod lung rigs gter mdzod zab don kun gsal skal bzang 'jug ngogs*. bKra shis 'khyil ed. Ta.
- Tshad ma 'byung tshul** gSer mdog paṇ chen shākya mchog ldan. *Tshad ma'i mdo dang bstan bcos kyi shing rta'i srol rnams ji ltar byung ba'i tshul gdam du bya ba nyin mor byed pa'i snang bas dpyod ldan mtha' dag dga' bar byed pa*. Collected Writings of gSer-mdog Paṇ-chen Śākya-mchog-ldan, Vol. 19. Reprinted by Nagawang Topgyal. Delhi. 1988.
- Tshad ma yid kyi mun sel** Phya pa chos kyi seng ge. *Tshad ma yid kyi mun sel*, in *bKa' gdams pa'i gsung 'bum*, Vol. 8.
- Tshad ma shes rab sgron ma** mTshur ston gzhon nu seng ge. *Tshad ma shes rab sgron ma*. P. Hugon ed. *mTshur ston gzhon nu seng ge: Tshad ma shes rab sgron ma*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 60. 2004.
- Tshad ma'i de nyid bsdus pa** “Klong chen rab 'byams pa”. *Tshad ma'i de kho nyid bsdus pa*. Si khron mi rigs dpe skrun khang. 2000.
- RĀ** Nāgārjuna. *Ratnāvalī*: M. Hahn ed. *Nāgārjuna's Ratnāvalī Vol. 1 The Basic Texts*. Indica et Tibetica. Bonn. 1982.
- Rigs gter** Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan. See *Rigs gter rang 'grel*.
- Rigs gter nyi ma** Blo bo mkhan chen bsod nams lhun grub. *sDe bdun mdo dang bcas pa'i dgongs 'grel tshad ma rigs pa'i gter gyi 'grel pa'i rnam bshad rigs lam gsal ba'i nyi ma in Tshad ma rigs gter gyi 'grel pa*. Krung go bod kyi shes rig dpe skrun khang. 1988.
- Rigs gter Dar ṭik** rGyal tshab rje dar ma rin chen. *Tshad ma rigs pa'i gter gyi rnam bshad legs par bshad pa'i snying po*. See Dreyfus and Onoda 1994.
- Rigs gter rang 'grel** Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan. *Tshad ma rigs pa'i gter gyi rtsa ba dang 'grel pa*. Mi rigs dpe skrun khang. 1989.
- Rigs tshogs rgyan** rMa bya byang chub brtson 'grus. *dBu ma rigs pa'i tshogs kyi rgyan de kho nyid snang ba*, in *bKa' gdams pa'i gsung 'bum*, Vol. 13.

Rigs tshogs rgyan rtsa ba rMa bya byang chub brtson 'grus. *dBu ma rigs pa'i tshogs kyi rgyan de kho na nyid snang ba'i rtsa ba*, in *bKa' gdams pa'i gsung 'bum*, Vol. 13.

Legs bshad rgya mtsho sTag tshang lo tsā ba shes rab rin chen. *Grub mtha' kun shes nas mtha' bral grub pa zhes bya ba'i bstan bcos rnam par bshad pa legs bshad kyi rgya mtsho in dPal ldan sa skya pa'i gsung rab*, Pod bcu pa, *grub mtha'*. Mi rigs dpe skrun khang/mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 2004.

Legs bshad bsdus pa gTsang nag pa brtson 'grus seng nge. *Tshad ma rnam par nges pa'i ti ka legs bshad bsdus pa*. Otani University Collection no. 13971. Otani University Tibetan Works Series, Vol. 2. Kyoto. 1989.

VŚ Vasubandhu. *Vimśatikā Vijñaptimātratāsiddhiḥ*: S. Lévi ed. *Vijñaptimātratāsiddhi, Deux Traités de Vasubandhu, Vimśatikā (la Vingtaine) accompagnée d'une Explication en Prose et Trimśikā (la Trentaine) avec la commentaire de Sthiramati*. Paris. 1925.

Shar gsum stong thun Phya pa chos kyi seng ge. *dBu ma shar gsum gyi stong thun* (aliases *dBu ma'i de kho na nyid bsdus pa* or *dBu ma de kho na nyid kyi snying po*). (1) H. Tauscher ed. *Phya pa chos kyi sen ge, dBu ma shar gsum gyi ston thun*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 43. 1999. (2) in *bKa' gdams pa'i gsung 'bum*, Vol. 7.

Shes rab 'od zer Phya pa chos kyi seng ge. *Tshad ma rnam par nges pa'i 'grel bshad yi ge dang rigs pa'i gnad la 'jug pa'i shes rab kyi 'od zer*. in *bKa' gdams pa'i gsung 'bum*, Vol. 8.

文献表

Dreyfus, B. J. G. and Onoda, S.

1994 *A Recent Rediscovery: Rgyal-tshab's Rigs gter rnam bshad*. Nagata Bunshodo. Kyoto. 1994.

Jackson, D. P.

1987 *The Entrance Gate for the Wise (Section III), Sa-skya Paṇḍita on Indian and Tibetan Traditions of Pramāṇa and Philosophical Debate*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 17.1–2.

Kellner, B.

1997 “Types of Incompatibility ('gal ba) and Types of Non-Cognition (ma/mi dmigs) in Early Tibetan *Tshad ma* Literature.” *Tibetan Studies, Proceedings of the 7th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Graz 1995*, Volume I, pp. 495–510.

van der Kuijp, L. W. J.

2003 “A treatise on Buddhist epistemology and logic attributed to Klong chen rab 'byams pa (1308–1364) and its place in Indo-Tibetan intellectual history.” *Journal of Indian Philosophy*, Vol. 31. pp. 381–437.

Onoda, S.

1992 “Phya pa Chos kyi seng ge's Theory of 'gal ba.” *Tibetan Studies, Proceedings of the 5th Seminar*

of the International Association for Tibetan Studies, Narita 1989. Volume I, pp. 197–202.

Williams, P.

- 1985 “rMa bya pa byang chub brtson ’grus on Madhyamaka Method.” *Journal of Indian Philosophy*, Vol. 13. pp. 205–225.

井内 真帆

- 2006 「ペルツェク・チベット文古籍研究室編纂『デプン寺所蔵古籍目録』：(書評・紹介)」『仏教学セミナー』83、pp. 16–24。

加納 和雄

- 2007 「ゴク・ロデンシェーラブ著『書簡—甘露の滴』—校訂テキストと内容概観—」『高野山大学密教文化研究所紀要』20、pp. 1–58。

谷 貞志

- 2000 『刹那滅の研究』春秋社。

戸崎 宏正

- 1985 『仏教認識論の研究』下巻、大東出版社。

福田 洋一

- 1989 「サキャ・パンディタの論理学上の立場」『日本西藏学会々報』35、pp. 21–29。

福田 洋一・木村 誠司・荒井 裕明

- 1989 『チベット論理学研究 第一巻 サキャ・パンディタ著『正しい認識手段についての論理の宝庫』第一章「対象」テキスト・和訳・注解』、東洋文庫。

山口 瑞鳳

- 1988 『チベット・下』(東洋叢書4)、東京大学出版局。

注

- (1) ゲルク派の文献に見られる「刹那」の解釈に関しては、拙稿「ゲルク派における刹那の解釈と時間論」(『南都佛教』89. pp.12–26. 2007年)にて詳細な分析を試みたので参照されたい。
- (2) 拙稿「ツォンカパの中観思想における業果設定の根拠」(『南都佛教』84. pp. 1–16. 2004年)および“Tsong kha pa on the Prāsaṅgika View of Time”(『印度学仏教学研究』56–3. pp. 132–6. 2008年)を参照されたい。
- (3) 現在伝えられている *Rigs gter rang ’grel* が果たしてサパンの真作であるかという問題については古くから論争がある。例えばギェルツァブジェは、「ある無知な者 (mi shes pa kha cig)」が *Rigs*

gter 本文と齟齬をきたすパッセージを自註の中に挿入したのであるとして、現行の *Rigs gter rang 'grel* の正当性を疑っている (*Rigs gter Dar 'ik*, 150a2–3. Cf. Dreyfus and Onoda 1994: 8)。

- (4) *bKa' gdams pa'i gsung 'bum* に関しては井内 2006、加納 2007 を参照。
- (5) *Shar gsum stong thun* の刊本が既に H. Tauscher 氏によって編集され 1999 年に出版されているが、*bKa' gdams pa'i gsung 'bum* 第 7 巻にも *dBu ma'i de kho na nyid bsdus pa* (57 fols) のタイトルで収録されている。加納 2007 (note 66) も指摘するように、*bKa' gdams pa'i gsung 'bum* に収録されている写本は Tauscher 氏が校訂に用いた底本とは異なるものである。
- (6) *Tshad ma yid kyi mun sel* (96 fols) は *bKa' gdams pa'i gsung 'bum* 第 8 巻に収録されている。本作品に関しては Kuijp 2003: 385, 400 を参照。
- (7) *Shes rab 'od zer* はチャパによる *Pramāṇaviniścaya* 註であり、*bKa' gdams pa'i gsung 'bum* 第 8 巻に *Tshad ma rnam par nges pa'i 'grel bshad* (197 fols) のタイトルで収録されている。
- (8) *bKa' gdams pa'i gsung 'bum* 第 13 巻に韻文体の *dBu ma rigs pa'i tshogs kyi rgyan de kho na nyid snang ba'i rtsa ba* (2 fols) と、散文体の自註 *dBu ma rigs pa'i tshogs kyi rgyan de kho na nyid snang ba* (34 fols) が収録されている。なお、同じ著者による *'Thad pa'i rgyan*, 21a6 に言及される *dBu ma'i de kho na nyid gtan la dbab pa* という作品はこの *Rigs tshogs rgyan* に相当すると推測される (cf. Williams 1985: 207)。
- (9) 大谷大学所蔵の *Legs bshad bsdus pa* の写本が 1989 年に既に出版されている。*bKa' gdams pa'i gsung 'bum* 第 13 巻に収録されている写本はこれと同一のものである。
- (10) ロンチェン・ラブジャムパ (Klong chen rab 'byams pa: 1308–64) に帰せられる *Tshad ma'i de nyid bsdus pa* の冒頭附近でも刹那の単一性をめぐる問題が扱われているが、そこにおいてもチャパと同様の見解が見られる (*Tshad ma'i de nyid bsdus pa*, 7.18–8.21)。
- (11) *Shar gsum stong thun*, 111.6–8 (citing VŚ k.12): *drug gis cig char sbyar bas na* // phra rab rdul cha drug du 'gyur // drug po dag ni go gcig na // gong bu rdul phran tsam du 'gyur //* (*according to *Shar gsum stong thun* 42a8; *cig bar sbyar ba na Shar gsum stong thun*) Cf. VŚ k.12: *ṣaṭkena yugapadyogāt paramāṇoḥ ṣaḍaṃśatā / ṣaṇṇāṃ samānadeśatvāt piṇḍaḥ syād aṇumātrakaḥ //* (「六個〔他の極微〕と同時に結合しているならば、極微は六部分を持つことになる。六個〔の極微〕が場所を同じくするならば、〔極微の集合体である〕塊が極微〔一個〕の大きさであることになってしまう。」)
- (12) *Shar gsum stong thun*, 124.3–4 (citing RĀ I 69): *ji ltar skad cig mtha' yod ltar // thog ma dbus kyang brtag par gyis // skad cig gsum gyi bdag nyid phyir // 'jig rten skad cig la mi gnas //* Cf. RĀ I 69: *yathānto 'sti kṣaṇasyaivam ādimadhyam ca kalpyatām / tryātmakatvāt kṣaṇasyivam na lokasya kṣaṇam sthitiḥ // ji ltar skad cig mtha' yod pa // de bzhin thog ma dbus brtag go // de ltar skad cig gsum bdag phyir // 'jig rten skad cig gnas pa min //* (「刹那には終わりがあるように、始めと中間も〔存在すると〕考えるべきである。こうして刹那は三者を本体とするので、世間は一刹那の間存続するものではない。」)
- (13) チャパによる「共存不可能の対立」に関する見解はギェルツァブジェの *'Gal 'brel gyi rnam gzhang* において言及され、批判されている (*'Gal 'brel gyi rnam gzhang*, 3a6 ff.)。「共存不可能の対立」や「対立」一般に関するチャパの見解については、Onoda 1992、Kellner 1997 を参照。
- (14) ゴク・ロデンシェーラプ (rNgog blo ldan shes rab: 1059–1109) の *Pramāṇaviniścaya* 註 *dKa' gnas rnam bshad* においても対抗者が排除対象を退けるプロセスについて論じられるが、そこにおいて刹那の単一性をめぐる問題は議論されていない (*dKa' gnas rnam bshad*, 280.15 ff.)。それゆえ、現時点で確言はできないが、*Tshad ma yid kyi mun sel* や *Shes rab 'od zer* に展開される以下の議論は

チャバが初めて導入した可能性があると言えるだろう。

- (15) PVinT 205a7–b1 等を参照。
- (16) 中観説を顧慮してチャバが述べているこうした見解は、ツルトウン・シヨンヌセンゲによって批判的に言及されている (*Tshad ma shes rab sgron ma*, 265.22–266.5.)。サパンもまた、*Rigs gter* 第七章「対立の考察」においてこの見解を取り上げ、批判を加えている (*Rigs gter rang 'grel*, 172.12 ff.)。
- (17) ロウオケンチェン (Glo bo mkhan chen: 1456–1532) は「軌範師チャバを始めとするある者は、極微に〔小ささの〕限界はないと主張している」と述べた上で、*Tshad ma yid kyi mun sel* のこの箇所を引用している (*Rigs gter nyi ma*, 42.11–13)。
- (18) セルドーバンチェン・シャーキャチョクデン (gSer mdog pañ chen shākya mchog ldan: 1428–1507) は、チャバがダルマキールティの最終的な立場を中観と見なしていたことを伝えている。チャバの論理学作品 *Tshad ma yid kyi mun sel* や *Shes rab 'od zer* に見られる刹那をめぐる議論は、そうしたシャーキャチョクデンの記述を支持するものと言える (*Tshad ma 'byung tshul*, 12a2 ff.; 15b5 ff.; 17a1 ff. Cf. Jackson 1987: 418.)。
- (19) 当該箇所に含まれる議論は山口 1988: 253–257 においても取り上げられている。
- (20) 福田 1989 は、サパンが論理学作品 *Rigs gter* において中観派の立場に立つことはないという理解を示している。サパン自身の中観理解は彼の *Thub dgongs rab gsal* などに見られ、そこでは勝義的存在としての不二知 (gnyis med kyi shes pa) が否定されている (*Thub dgongs rab gsal*, 62a4. Cf. Jackson 1987: 418–419.)。
- (21) *Rigs gter rang 'grel* 第七章ではそのことが明確に述べられる。 *Rigs gter rang 'grel*, 172.25–173.1: gang dag chos kyi grags pa'i mnam gzhas khas len bzhin du skad cig cha shas can du 'dod pa ni rigs pa'i ra ba las 'das pa yin no // (「ダルマキールティの規定を受け入れつつも、刹那が部分を有すると主張する者は、論理の枠から外れた者である。」)
- (22) *Rigs gter rang 'grel* では、ここで否定される見解の担い手が「チベット人達」とされる。 *Rigs gter* の諸註釈はこれに関して情報を与えていないが、中観の立場からダルマキールティの論理学説を捉え、その論理学説の枠組みの中で刹那の単一性を否定しようとしたカダム派の学者達を指していると思われる。 *Rigs gter rang 'grel*, 55.17–18: 'di la bod mams rdul dang skad cig gnyis 'gog pa'i rigs* pa mtshungs pas skad cig cha shas can yin no zhes zer ba ni mi mtshungs te / (「これについてチベット人達は『極微と刹那の両者を〔それぞれ〕否定する論理は共通したものである』と主張するので、刹那は部分を有するものである』と云うが、〔そうした〕共通性は〔成り立た〕ない。」 *rigs 福田・木村・荒井 1989: 53; rig *Rigs gter rang 'grel*)
- (23) PVin II: 46.20 (mentioned in *Rigs gter rang 'grel*, 56.10; cf. 谷 2000: 106–109): skad cig ma la cha shas med pa'i phyir ro // (「刹那に部分は存在しないからである。」)
- (24) PV III 359 (cf. 戸崎 1985: 45–6): bhāvā yena nirūpyante tadrūpaṃ na asti tattvataḥ / yasmād ekam anekaṃ vā rūpaṃ teṣāṃ na vidyate // gang gis dngos po mnam dpyad na // de nyid du na de dngos med // gang gi phyir na de dag la // gcig dang du ma'i rang bzhin med // (この偈頌の読みをめぐる問題点は福田・木村・荒井 1989: 76–7 に指摘されている。サンスクリット原文に従えば「諸事物がある〔相〕を通じて知覚される時、真実としてその相は存在しない。なぜなら、それらには一と多の相が存在しないからである」、ギェルツァブジェやコラムパなどチベット人の註釈に従えば「諸事物をある〔論理〕によって吟味するならば、真実としてその〔諸事物〕は実在しない。なぜなら、それらには一と多の自性が存在しないからである」と訳せよう。)
- (25) ロウオケンチェンによれば、軌範師ニエルパなど (slob dpon gnyal pa la sogs pa) は PV III 359

- を「時間が一と多の自性を欠いていること」を説くものと解しているという (*Rigs gter nyi ma*, 43.22-4)。「軌範師ニエルパ」とはテンバクパ (Dan 'bag pa) の弟子ニエルシク・ジャムペードルジェ (gNyal zhig 'jam pa'i rdo rje) を指すと思われるが、詳細は不明である。
- (26) ギェルツァブジェは若い頃レンダール・シヨヌロドゥ (*Red mda' ba gzhon nu blo gros*: 1348/9-1412) 等に師事してサキヤ派の論理学を学んだが、その後ツォンカパの弟子となり、ゲルク派の見解の下で書かれた論理学作品を多く残している。ギェルツァブジェがいつの時点で *Rigs gter* 註を著したかは不明であり (Dreyfus and Onoda 1994: 2-3 を参照)、それゆえ、彼がいかなる立場からサパンの思想的立場について論じているのかも明らかではない。
- (27) *Dri lan*, 1a5-2a2: *dus mtha'i skad cig rgyu tshogs du ma yis // 'bras bu bskyed pa'i yun dang se gol gcig // rdzogs pa'i dus la re lngar byas pa yi // cha gcig dang ni rdul gcig go 'phos dang // mnyam pa'i shed kyis bag nyal* gcig gcod pa'i // yun la bshad pa'i rnam grangs mang yod kyang // mdor na de las thung ba byar med pa'i // dus gcig mtshon par bzhed nas de dag gsungs //* (「時間の極限としての刹那は、多数の原因総体が結果を生み出す時間、一回の弾指が完了する時間の 1/65、〔法が〕一つの極微分〔の距離〕を移動するのに等しい〔時間〕である〔。以上の〕ことに基づいて、〔一刹那とは〕一つの随眠が断たれる時間であるといった数多くの説明の仕方があるけれども、要約すれば、それ以上短く分割できない単一の時間を説明しようと〔師ヴァスバンドゥは〕お考えになってこれらをお説きになったのである。」 *Read bag nyal ; bal nyag *Dri lan*)
- (28) ギェルツァブジェは *Pramāṇaviniścaya* 註を著しており、その第二章における「共存不可能の対立」に関する議論の中には、対抗者が排除対象を退けるプロセスについての説明が見られる (*rNam nges Dar ģik*, Ja. 211b6 ff.). しかし、そこにおいては、チャパの *Tshad ma yid kyi mun sel* や *Shes rab 'od zer* に見られるような刹那の単一性をめぐる問題は議論されていない。
- (29) ジャムヤンシェーパの *dBu ma chen mo* には刹那の単一性を否定する中観の理論が略説される。ジャムヤンシェーパによれば「タクツァン・ロツァーフと彼に随順するある者」は刹那の無部分性を主張しているとされる。*dBu ma chen mo*, 86b6-7: *yang stag lo dang de'i rjes 'jug kha cig na re / dus mtha'i skad cig ma cha med yin zer / 'o na / dus mtha'i skad cig ma chos can / cha med ma yin par thal / thog mtha' bar gsum gyi cha dang ldan pa'i phyir /* (「さらに、タクツァン・ロツァーフと彼に随順するある者が〔次のように〕述べている。『極小時間としての刹那は部分を持たない』と。ならば〔次のように答えよう。〕〔帰結〕極小時間としての刹那——主題——は無部分でないことになる。〔証因〕前中後の三部分を伴っているゆえに。」) しかし、実際にはタクツァン・ロツァーフの *Legs bshad rgya mtsho* に刹那が諸部分を有するという理論が説かれることに注意を要する (*Legs bshad rgya mtsho*, 146.1 ff.).